花鏡

一調　二機　三声　　音曲開口初声

調子をば機が持つなり。吹物の調子を音取りて、機に合はせすまして、目をふさぎて、息を内へ引きて、さて声を出せば、声先、調子の中より出づるなり。調子ばかりを音取りて、機にも合はせずして声を出だせば、声先調子に合ふ事、左右なく無し。調子をば機に籠めて声を出すがゆへに、一調・二機・三声とは定むる也。

又云、調子をば機にて持ち、声をば調子にて出し、文字をば口びるにて分かつべし。文字にもかからぬほどの曲をば、顔の振り様を以てあひしらふべし。能能心中にあてて念ろうすべきなり。

宮急尚上下、声成文、謂音之。宮急陰。地・呂・出息。尚陽。天・律・入息。呂律合声上下、云声文。分五音成十二律。呂六、律六。

動十分心　動七分身

「心を十分に動かして身を七分に動かせ」とは、習う所の、手を指し、足を動かす事、師の教へのままに動かして、その分をよくよくし極めて後、指し引く手を、ちちと、心ほどには動かさで、心より内に控ふる也。これは、かならず、舞・はたらきに限るべからず。立ふるまふ身づかひまでも、心よりは身を惜しみて立ちはたらけば、身は体になり、心は用になりて、面白き感あるべし。

　　　　強身動宥足踏　強足踏宥身動

　これも、大かた、先の心十分の心也。身と足と同じやうに動けば、荒く見ゆるなり。身をつかふ時、足を盗めば、狂うとは見ゆれども、荒からず。足を強く踏む時、身を静かに動かせば、足音は高けれども、身の静かなるによりて、荒くは見えぬ也。これすなはち、見聞同心ならぬ所、両体和合に成て、面白き感あり。

　そうじて、足を踏み習ふ事、舞にては踏み習ふべからず。余のはたらき・物まねにて踏み習ふべし。

先聞後見

一切の物まね風体は、云事の品によりての見聞也。是を、云事のすなはちにし、あまさへ、言葉より進みて風情の見ゆるる事あり。聞く所と見る所と、前後する也。まづ、諸人の耳に聞く所を先立て、さて、風情を少し後るるやうにすれば、聞く心よりやがて見ゆるる所に移る堺にて、見聞成就する感あり。

たとへば、泣くと云事には、「泣く」と云言葉を人に聞かせて、その言葉より少し後るるやうに、袖を顔にあつれば、風情にて止まる也。「泣く」と聞きも定めぬより、袖を顔にあつれば、言葉が後れて残るゆへに、言葉にて止まる也。さるほどに、風情が先に果てて、はぐるる気色あり。しかれば、風情にて止まるべきがゆへに、「先づ聞かせて後に見せよ」と也。

先能其物成、去能其態似

「其の物に能く成る」と申たるは、申楽の物まねの品品也。尉にならば、老したる形なれば、腰を折り、足弱くて、手をも短か短かと指し引くべし。その姿に先づ成りて、舞をも舞ひ、立はたらきをも、音曲をも、その形の内よりすべし。女ならば、腰をも少し直に、手をも高高と指し引き、五体をも弱弱と、心に力を持たずして、しなしなと身を扱ふべし。さて、その姿の内より、舞をも、音曲をも、立ふるまふ事までも、その態をすべし。怒れる事ならば、心に力を持ちて、身をも強強と構へて、さて立はたらくべし。その外、一切の物まねの人体、先づ其の物に能く成る様を習ふべし。さて其の態をすべし。

舞声為根

舞は、音声より出でずば感あるべからず。一声の匂ひより舞へ移る堺にて、妙力あるべし。又、舞おさむる所も、音感へおさまる位あり。

抑、舞歌と者、根本、如来蔵より出来せり、と云云。まづ、五臓より出づる息、五色に分かれて、五音・六調子となる。双調・黄鐘・一越調、是三律。平調・盤渉、是二呂。無調は、律呂両声より出でたる用の声なり。しかれば、五蔵より声を出すに五体を動かす人体、是、舞となる初め也。

しかれば、時の調子と者、四季に分かち、又、夜・昼十二時に、をのをの、双・黄・一越・平・盤の、その時時にあたれり。又云、時の調子とは、天人の舞歌の時節、天の調感爰に移りて通ずる折を、時の調子とは申なり、と云云。天道は舞歌の時節不定あるまじければ、両説ともに、その謂れかなへりと見えたり。しかれば、駿河舞の事、天女天降りて舞歌の曲を留めし来歴より、此国に伝る秘曲となる。事多ければ、記すに及ばず。

ただ、舞は音声の力足らずば感あるべからずと心得べきまで也。まづ、常の舞にも、節曲舞などの音曲にて舞へば、便りありて舞いよきなり。又、笛・鼓の拍子なくては舞はるまじきなり。是、音力にて舞ふにてあらずや。

　又云く、舞に五智あり。一、手智、二、舞智、三、相曲智、四、手体智、五、舞体智也。

一、手智者、合掌の手より、五体を動かし、手を指し引き、舞一番を序破急へ舞おさむる曲道を習得する事也。是を手智と云。

二、舞智者、手と云も舞なれども、手足を扱はずして、ただ、姿かかりを体にして、無手無風なるよそほひをなす道あり。縦ば飛鳥の風にしたがふよそほひなるべし。是を舞と云。

三、相曲智者、以前の手智序破急の間に、舞を添へたり。手をなすは有文風、舞をなすは無文風なり。有無風を相曲に和合する所、既に見風成就也。是、面白と見る堺曲也。此二道を心得て舞曲をなすを、相曲智と名付。

四、手体風智者、此相曲に於いて、有無和合風の内に、手を体にして、舞を用にする体風あるべし。如此心得るを、手体風智と名付。

五に舞体風智者、舞を体にして、手を用にする体風なり。これ無姿也。

　凡、三体の風姿にあてて見るに、男体には手体風智相応なるべき歟。女体には舞体風智よろしかるべき歟也。よくよく、物まねの人体によりて、風曲をなすべき也。

　又、舞に、目前心後と云事あり。「目を前に見て、心を後に置け」となり。是は、以前申つる舞智風体の用心也。見所より見る所の風姿は、我が離見也。しかれば、我が眼の見る所は、我見也。離見の見にはあらず。離見の見にて見る所は、則、見所同心の見なり。其時は、我姿を見得する也。我姿を見得すれば、左右前後を見るなり。しかれ共、目前左右までをば見れども、後姿をばいまだ知らぬか。後姿を覚えねば、姿の俗なる所をわぎまへず。さるほどに、離見の見にて、見所同見と成て、不及目の身所まで見智して、五体相応の幽姿をなすべし。是則、「心を後に置く」にてあらずや。返返、離見の見を能能見得して、眼まなこを見ぬ所を覚えて、左右前後を分明に安見せよ。定て花姿玉得の幽舞に至らん事、目前之証見なるべし。

担板感云、惣じて、舞・動に至るまで、左右前後とおさむべし。

題目六ヶ条　已上。

時節当感事

申楽の、当座に出て、さし事・一声を出すに、其時分の際あるべし。早きも悪し。遅きも悪かるべし。先、楽屋より出て、橋がかりに歩み止まりて、諸方をうかがひて、「すは声を出だすよ」と、諸人一同に待ち受くるすなはちに、声を出だすべし。是、諸人の心を受けて声を出だす、時節感当也。この時節少しも過ぐれば、又諸人之心ゆるくなりて、後に物を云出せば、万人の感に当たらず。此時節は、ただ見物の人の機にあり。人の機にある時節と者、為手の感より見する際なり。是、万人の見心を為手ひとりの眼精へ引き入るる際也。当日一の大事の際也。

　凡、橋がかりは、橋を三分一ほど行き残して、一声をば出すべし。二句をば、橋の詰め、舞台の堺程にて云べし。顔をば桟敷の順にあてて、桟敷をばまもるべからず。そうじて、顔の持ち様、貴人の御顔にあてて、その順に持つべし。内申楽・酒盛などにも、大人の御顔の順にあてて顔を持ちて、御顔をばまもるべからず。舞の手持ちは、顔持ちに相応して袖を指すものなれば、この宛てがひを以て立はたらけば、大なる座式にも、小さき座敷にも、酒盛などまでも、身なりに相応するなり。よくよく宛てがふべし。

又、舞台に立事、囃し手の座より舞台を三分二ほど前を残して立べし。又、舞などにも、舞い出し、舞い止むる所、舞台を三分一ほど後を残して、舞い初め、舞いおさむべし。又、大庭の申楽には、御前を近くなすやうに心得べし。小庭などならば、御前を遠くなすべし。ことさら、内申楽などならば、いかにもいかにも御前を遠くなすやうに用心すべし。

又、内にての音曲なども、その座式の人の心を取る時分あるべし。早きも悪く、遅からんもまして悪かるべし。「すは声を出すよ」と、、人の心に待ち受けて、心耳を静むる際より、声を出だすべし。爰にて、一調二機三声を以て、声先を出だす也。

序破急之事

序者、初めなれば、本風の姿也。脇の申楽、序なり。直なる本説の、さのみに細かになく、祝言なるが、正しく下りたるかかりなるべし。態は舞歌ばかりなるべし。歌舞は此道の本態風なり。二番目の申楽は、脇の申楽には変りたる風体の、本説正しくて、強強としたらんが、しとやかならん風体なるべし。是は、脇の申楽に変りたる風情なれども、いまださのみに細かにはなくて、手をもいたく砕く時分にてなければ、是も、いまだ序の名残の風体也。

三番目よりは、破也。これは序の本風の直に正しき体を、細かなる方へ移しあらはす体なり。序と申はをのづからの姿、破は又、それを和して注する釈の義なり。さるほどに、三番目より、能は、細かに手を入て、物まねのあらん風体なるべし。其日の肝要の能なるべし。かくて、四五番までは破の分なれば、色色を尽くして事をなすべし。

　急と申は、挙句の義なり。その日の名残なれば、限りの風なり。破と申は、序を破りて、細やけて、色色を尽くす姿なり。急と申は、又その破を尽くす所の、名残の一体也。さる程に、急は、揉み寄せて、乱舞・はたらき、目を驚かす気色なり。揉むと申は、この時分の体なり。

　凡、昔は、能数、四五番には過ぎず。さるほどに、五番目はかならず急なりしか共、当時は、けしからず能数多ければ、早く急に成ては、急が久しくて急ならず。能は、破にて久しかるべし。破にて色色を尽くして、急は、いかにもただ一きりなるべし。

　但、貴人の御意によりて仕る能は、次第不同なれば、かねての宛てがひ変るなり。それに付ても、心得て、いまだ末あるべき能には、たとひ、急なる能を御意によりて仕るとも、心中に控へて、さのみに揉まで、心七分動を心得て、なをなを奥を残すやうにすべし。

　爰に大事あり。自然、能をする内に、はや破・急の時分に成て、貴人の御後来に御入ある事あり。それは、はや申楽は急に及べ共、貴人の御心はいまだ序也。さるほどに、序の御心にて急なる能を御覧ずれば、すべて御意に合はず。結句、先に見つる見物衆も、貴人の御座より、皆皆機を静めて、座敷あらぬ体に成て、諸人の心も、座敷も、又序になる気色あり。此時節の能、さらに出で来ず。さるほどに、又序に成かへりて能をすべきかなれ共、それも又、なにとやらむ能悪し。一大事なり。かやうならん折をば、心得て、破なる能のよからんを、心を少序になして、しとやかにして、上意を取るべし。かやうに、貴人の御心を取り動かして、又座敷を破・急ににこにことしなすやうに、故実を以てすべし。たとひ、かやうに心を入てするとも、十分にはあるべからず。

又、自然、期せざる御会の申楽ありて、大御酒の時分などに、にわかに召されて能を仕る事あるべし。それは又、御座敷ははや急也。仕るべき能は序也。是又大事也。かやうならん時の申楽をば、序を仕らん内にて、少し心を破に持て、ざのみにねやさで、軽軽と機を持ちて、破・急へ早く移るやうに能をすべし。是は能の故実也。しかれば、能よき事もあるべし。

又、酒盛なども、同じ心得場なり。「はや酒盛あるべし」とて、兼てより心得て、扇拍子より、祝言の音曲、次第次第の風体は、心得たる事なれば、用意のままなるべし。自然、御後来の御座敷あらん時は、先の心根を以て、急を少し序になして、故実を以てすべし。又。御座敷の急に参たらん時は、又先の故実と以て、序の心を少し急に持ちて仕べし。

しかれば、序破急の心得、大義の申楽より始めて、酒盛、又はかりそめの音曲の座敷までも、次第次第を心得べし。

知習道事

　至りたる上手の能をば、師によく習ひては似すべし。習はでは似すべからず。上手は、はや極め覚え終りて、さて、安き位に至る風体の、見る人のため面白きを、ただ面白とばかり心得て、初心是を似すれば、似せたりとは見ゆれ共、面白き感なし。上手は、はや、年来、心も身も十分に習ひ至過て、さて、動七分身に身を惜しみて、安くする所を、初心の人、習もせで似すれば、心も身も七分になる也。さるほどに詰まる也。

　然者、習ふ時には、師は、我が当時する様には教えずして、初心なりし時のやうに、弟子を、身も心も十分に教うる也。教へすまして後、次第次第に上手になる所にて、安き位に成て、身を少少と惜しめば、をのづから身七分動になる也。

　そうじて、安き位を似する道理あるべからず。似せば大事なるべし。大事なる所は、せめて似すべき便りもあるべし。「似たる事は似たれ共、是なる事は是ならず」と云へり。此是に似する宛てがひあるべしや。大安不二。口伝有。

一、師となり、弟子になる事、大かたを習う事は常の事なれ共、師の許す位は、弟子の

下地と心を見すましてならでは許さぬ子細あり。易云、非其人伝其書、所天悪。下地おろそかなれば、許す事かなはず。そのゆへは、おろそかなるを許せば、許す位は高上なり。下地は及ばねば、相応せぬによてかなはず。かなはねば、許す事偽りに成て、いたづらなるゆへに、許さぬ也。

　抑、その物に成る事、三そろはねばかなはず。下地のかなふべき器量、一。心に好きありて、此道に一行三昧になるべき心、一。又。此道を教ふべき師、一也。此三そろはねば、その物にはなるまじき也。其物と者、上手の位に至りて、師と許さるる位なり。

又、当時の若為手の芸態風を見るに、転読になる事あり。是も又、習はで似するゆへなり。二曲より三体に入て、年来稽古ありて、次第連続に習道あらば、いづれも得手に入て、頭頭の芸風になるべき事なるを、ただ似せ学びて、一旦の事をなすゆへに、転読になるかと覚えたり。先、二曲を習はん程は、三体をば習ふべからず。三体を習ふ時分なりとも、軍体をばしばらく習ふべからず。軍体を習う共、砕動・力動などまでをば残すべき、年来の時分あるべし。是を、一度に習ひ、一度に似せん事、いかほどの大事ぞや。返返、思ひも寄らぬ事なるべし。若、年若き為手の、達者に紛れて、転読なりとも一旦の花あるべし。それは、年行かば能は下るべし。もし下らずとも、名人になる事、返返あるべからず。心得べし。

又、此転読に付て、心得べき事あり。あまりにめづらしき能ばかりを好みて、古き能をし捨てし捨て、能の主にならぬも、又能の転読なり。得手に入たる能を、定能にし定めて、その内に新しき能を交ぜてすべし。めづらしきばかりに移りて、もとの能を忘るれば、是又、能の位、大なる転読なり。めづらしきばかりをすれば、又めづらしからず。古きに新しきを交うれば、古きも、又新しきも、ともにめづらしきなり。是、まことの花なるべし。孔子云、「温故新知。可以為師」。

　　　　　上手之知感事

音曲・舞・はたらき足りぬれば、上手と申也。達者になければ、不足なる事是非なけれども、それにはよらず、上手は又別にある物也。そのゆへは、声よく、舞・はたらき足りぬれ共、名人にならぬ為手あり。声悪く、二曲さのみの達者になけれども、上手の覚え天下にあるもあり。是則、舞・はたらきは態也。主に成る物は心なり。又正位也。さるほどに、面白き味わいを知りて、心にてする能は、さのみの達者になけれ共、上手の名を取る也。しかれば、まことの上手に名を得る事、舞・はたらきの達者にはよるべからず。是はただ、為手の正位心にて、瑞風より出る感かと覚えたり。此分目を心得る事、上手也。しかれば、十分に極めたる為手も、面白き所のなきもあり。初心より面白き所のあるもあり。しかれば、初心より、七八分、十分になりぬれば、次第次第に上手の位に至れ共、面白きと思ふは、又別也。

　又、面白き位より上に、心にも覚えず「あつ」と云重あるべし。是は感なり。これは、心にも覚えねば、面白しとだに思はぬ感なり。爰を「混ぜぬ」とも云。しかれば、易には、感と云文字の下、心を書かで、咸ばかりを「かん」と読ませたり。是、まことの「かん」には、心もなき際なるがゆへなり。

為手の位も如此。初心より連続に習い上りては、よき為手と言はるるまでなり。是は、はや上手に至る位也。その上に面白き位あれば、はや名人の位なり。その上に無心の感を持つ事、天下の名望を得る位なり。此重重を能能習いて、工夫して、心を以て能の高上に至り至るべし。

　　　　浅深之事

能に、心にかけて思ふべき事あり。細かになければ面白からず。さて、細かなる心を心がくれば、能姿小さく見ゆるる相あり。又、大様にせんと心がくれば、見所少なくて、のさになる相あり。此分目、すべてすべて大事也。

まづ、細かなるべき所をばいかにも細やけて、大様なるべき所をば大様にすべきかなり。此分目、ことにことに能を知らではかなふべからず。よくよく師に問ひて、是を明らむべし。しかれども、大方心得べき様あり。二曲、振り・風情、よろづに付て、心を細かにして、身を大様にすべし。よくよく心にかけて、定心に持つべし。

そうじて、能は、大なる形木より入たる能は、細かなる方へも行くべし。小さき形木より育ちたる能は、大なる方へは左右なく行くまじき也。大の内には小あり。小の内には大なし。よくよく工夫すべし。大小にわたるは、広き能なるべし。太寒氷解、小寒云云。

　　　　幽玄之入堺事

　幽玄の風体の事、諸道・諸事に於いて、幽玄なるを以て上果とせり。ことさら当芸に於いて、幽玄の風体第一とせり。先、大かたは、幽玄の風体目前にあらはれて、是をのみ見所の人も賞翫すれ共、幽玄なる為手、左右なく無し。是、まことに幽玄の味はひを知らざるゆへなり。さるほどに、その堺へ入為手なし。

　抑、幽玄の堺と者、まことにはいかなる所にてあるべきやらん。先、世上の有様を以て、人の品品を見るに、公家の御たたずまひの位高く、人望余に変れる御有様、是、幽玄なる位と申べきやらん。しからば、ただ美しく柔和なる体、幽玄の本体なり。人体のどかなるよそほひ、人ないの幽玄也。又、言葉優しくして、貴人・上人の御慣らはしの言葉づかひをよくよく習ひうかがひて、かりそめなりとも口より出ださんずる詞の優しからん、是、詞の幽玄なるべし。又、音曲に於いて、節かかり美しく下りて、なびなびと聞えたらんは、是、音曲の幽玄なるべし。舞は、よくよく習ひて、人ないのかかり美しくて、静かなるよそほひにて、見所面白くば、これ、舞の幽玄にてあるべし。又、物まねには、三体の姿かかり美しくば、是、幽玄にてあるべし。又、怒れるよそほひ、鬼人などになりて、身なりをば少し力動に持つとも、又美しきかかりを忘れずして、動十分心、又、強身動宥足踏を心にかけて、人ない美しくば、是、鬼の幽玄にてあるべし。

この色色を心中に覚えすまして、それに身をよくなして、何の物まねに品を変へてなる共、幽玄をば離るべからず。たとへば、上﨟・下﨟、男・女、僧・俗、田夫・野人、乞食・非人に至るまで、花の枝を一房づつかざしたらんを、をしなべて見んがごとし。その人の品品は変るとも、美しの花やと見んことは、皆同じ花なるべし。この花は人ないなり。姿をよく見するは心なり。心というは、この理を能能分けて、言葉の幽玄ならんためには歌道を習ひ、姿の幽玄ならんためには、尋常なる仕立の風体を習ひ、一切、ことごとく、物まねは変るとも、美しく見ゆる一かかりを持つ事、幽玄の種と知るべし。

ただ、ややもすれば、その物その物の物まねばかりをし分たるを至極と心得て、姿を忘るるゆへに、左右なく幽玄の堺に入らず。幽玄の堺に入らざれば、上果に至らず。上果に至らざれば、名を得る上手にはならぬ也。さるほどに、名人は左右なく無きなり。ただ、この幽玄の風の大切なる所を感用にして、楷古すべし。

　此上果と申は、姿かかりの美しき也。ただ返返、身なりを心得てたしなむべし。しかれば、極め極めては、二曲を初めて、品品の物まねに至るまで、姿美しくば、いづれも上果なるべし。姿悪くば、いづれも俗なるべし。見る姿の数数、聞く姿の数数の、おしなめて美しからんを以て、幽玄と知るべし。この理を我と工夫して、其主になり入るを、幽玄の堺に入る者とは申也。此品品を工夫もせず、ましてそれにもならで、ただ幽玄ならんとばかり思はば、生涯、幽玄はあるまじきなり。

　　　　劫之入用心之事

此芸能を習学して、上手の名を取りて、毎年を送りて、位の上るを、よき劫と申也。しかれども、此劫は住所によりて変るべき事あり。名望を得る事、都にて褒美を得ずばあるべからず。さやうの人も、在国して、田舎にては、都の風体を忘れじとする劫斗にて、結句、よき事をも忘れじ忘れじとする程に、少少と、よき風情のこくなる所を覚えねば、悪き劫になる也。これを、住劫と嫌ふなり。

　都にては、目利の中なれば、少しも主に覚えず住する所、やがて見物衆の気色にも見え、又は讃談・褒貶にも耳を打たすれば、連連悪き所除きて、よき劫ばかりになれば、磨き立てられて、をのづから、玉を磨くがごとくなる劫の入也。「曲蓬麻間生時は、矯めざるにをのづから直し。白砂土中にある時は、是みなともに黒し」と云へり。都に住めば、よき中にあるによて、をのづから悪き事なし。少少と悪しき事の去るを、よき劫とす。よき劫の別に積もるにはあらず。ただ、返す返す、心にも覚えず、よき劫の重して、悪き劫になる所を用心すべし。

　しかれば、よき程の上手も年寄れば古体になるとは、この劫也。人の目には見えて嫌ふ事を、「我は昔より此よき所を持ちてこそ名をも得たれ」と思ひつめて、そのまま人の嫌ふ事をも知らで、老の入舞をし損ずる事、しかしながら此劫也。能能用心すべし。

　　　　万能綰一心事

　見所の批判に云、「せぬ所が面白き」など云事あり。是は、為手の秘する所の安心なり。まづ、二曲を初めとして、立はたらき・物まねの色色、ことごとくみな身になす態也。せぬ所と申は、その隙なり。このせぬ隙はなにとて面白きぞと見る所、是は、油断なく心をつなぐ性根也。舞を舞い止む隙、音曲を謡ひ止む所、その外、言葉・物まね、あらゆる品品の隙隙に、心を捨てずして、用心を持つ内心也。此内心の感、外に匂ひて面白きなり。

かやうなれども、此内心ありと、よそに見えては悪かるべし。もし見えば、それは態になるべし。せぬにてはあるべからず。無心の位にて、我心をわれにも隠す安心にて、せぬ隙の前後を綰ぐべし。是則、万能を一心にて綰ぐ感力也。

　「生死去来、棚頭傀儡、一線断時、落落磊磊」。是は、生死に輪廻する人間の有様をたとへ也。棚の上の作り物のあやつり、色色に見ゆれ共、まことには動く物にあらず。あやつりたる糸のわざ也。此糸切れん時は落ち崩れなんとの心也。申楽も、色色の物まねは作り物なり。これを持つ物は心なり。此心をば、人に見ゆべからず。もしもし見えば、あやつりの糸の見えんがごとし。返返、心を糸にして、人に知らせずして、万能を綰ぐべし。如此ならば、能の命あるべし。

　惣じて、即座に限るべからず。日日夜夜、行住座臥に、この心を忘れずして、定心に綰ぐべし。かやうに油断なく工夫せば、能いや増しになるべし。

此条、極めたる秘伝也。　　　　　　　　稽古有勧急。

　　　　妙所之事

妙とは「たへなり」となり。「たへなる」と云ぱ、形なき姿也。形なき所、妙体也。

抑、能芸に於いて、妙所と申さん事、二曲を初めて、立振舞、あらゆる所に此妙所はあるべし。さて、言はんとすればなし。若此妙所のあらん為手は、無上の其物なるべし。しかれ共、又、生得、初心よりもこの妙体のおもかげのある事もあり。その為手は知らねども、目利の見出だす見所にあるべし。ただ大かたの見物衆の見所には、「なにとやらん面白き」と見る見風あるべし。是は、極めたる為手も、我風体にありと知るまで也。「すわ、そこをする」とは知るまじきなり。知らぬを以て妙所と云。少しも言はるる所有ば、妙にてはあるまじき也。

しかれ共、是をよくよく工夫して見るに、ただ、此妙所は、能を極め、堪能その物に成て、闌けたる位の安き所に入ふして、なす所の態に少しもかかわらで、無心無風の位に至る見風、妙所に近き所にてやあるべき。凡、幽玄の風体の闌けたらんは、此妙所に少し近き風にてやあるべき。能能心にて見るべし。

比判之事

抑、能批判と云に、人の好みまちまち也。然者、万人の心に合はん事、左右なくありがたし。さりながら、天下に押し出されん達人を以て本とすべし。

まづ、当座にて、出来たる能、出で来ぬ能の際を、よくよく見分、聞き分て、是を知るべし。能の出で来る当座に、見・聞・心の三あり。

　見より出で来る能と申は、指寄りからやがて座敷も色めきて、舞歌曲風面白くて、見物の上下、感声を出だして、はへばへしく見えたる当座、これ、見より出来たる能なり。かやうなる出庭は、目利は申に不及、さほどに能を知らぬ人までも、みな同心に「面白や」と思ふ当座なり。さりながら、かやうの能に、為手の心得べき事あり。あまりに能出で来て、なにとするも面白きほどに、見手の心浮き立つ所にて、諸人の目・心、隙なくなりて、能少し紛るる相あり。為手も心はやりして、風情を尽くす所にて、見手の心、為手の心、隙なく成て、よき所の堺紛れて、能の向き、けてうになる方へ行きて、悪くなる相あり。是を、能の出来過ぐる病とす。か様なる時は、能を少し控へて、風情・よそをいを少少とかかへて、見物の人の目・心を休めて、隙をあらせ、息をつかせて、面白き所を静かに見すれば、なを面白き感出で来て、いよいよ能後強になりて、番数にしたがひて感風尽きすべからず。如此の申楽の出来庭を、見より出来る能とは申也。

　聞より出来る能と申は、指寄りしみじみとして、やがて音曲調子に合て、しとやかに面白き也。是、まづ音曲のなす感なり。無上の上手の得手に入当感也。かやうに出で来る味はいをば、ゐ中目利などは、さほどとも思はぬ也。か様なる能は、無上の上手は、をのづから、内心より風体色色に出で来れば、なをいよいよ面白くなる也。若、中つあしの為手の、さほどにも心のなからんが、かやうならん時の能をせば、後弱になる事あるべし。凍み氷りて、静かに美しく出で来たるままに能をすれば、番数重なる時、能の気色沈む相あり。それを心得て、少し能に心を入て、面白きかどを少少と見せて、見物者の心を引き驚かして、風体を詰め開くべし。無上の上手は、をのづから、物数・身・心より、舞歌の風義の遠見あらはるる所にて、なをなを面白く成行也。中つあしの為手は、能能心得て、番数にしたがひて沈まぬやうに心得べし。是を又、「沈まぬやうにするよ」と見物衆の目には見すべからず。見物衆はただ「面白くなるよ」とばかり思ふやうにすべし。是を為手の秘事・故実とす。此如能の当座を、聞より出来る能とは申也。

　心より出来る能とは、無上の上手の申楽に、物数の後、二曲も物まねも義理もさしてなき能の、さびさびとしたる中に、なにとやらん感心のある所あり。是を、冷たる曲とも申也。此位、よきほどの目利も見知らぬなり。まして、ゐ中目利などは、思ひも寄るまじきなり。是はただ、無上の上手の得たる瑞風かと覚えたり。これを、心より出来る能とも云、無心の能とも、又は無文の能とも申也。

　かやうの細かなる風体の数数を、能能心得分て知るべし。

　惣じて、目利ばかりにて、能を知らぬ人もあり。能をば知れども、目の利かぬもあり。

目・智相応せば、よき見手なるべし。上手の申楽の出来ざらん時と、下手の申楽の出で来たらん時とを本にして、批判すべからず。大事・大庭の能に出で来る事、上手の慣らひなり。小庭・片わきなどにて出で来る能は、下手の慣らひ也。見所より面白がる様を心得てする為手は、能に徳あるべし。又、為手の心を知り分て能を見る見手は、能を知りたる見手なるべし。比判云、「出来庭を忘れて能を見よ。能を忘れて為手を見よ。為手を忘れて心を見よ。心を忘れて能を智れ」と也。

音習道之事

習様、二色にあり。歌いの本を書人の、曲を心得て、文字移りを美しく作るべき事、一。又、歌う人の、節を付て、文字を分かつべき事、一也。文字によりて、かかりに成て、五音正しく、句移りの文字鎖りの、すべやかに聞よくて、なびなびとあるやうに、節をば付也。さて、謡ふ時は、其曲を能能心得分て謡へば、曲の付様、謡ひ様、相応する所にて、面白き感あるべし。しかれば、ただ、節の付様を以て、謡の博士とすべし。文字移りの美しく、清み濁りの曲に似合たるが、かかりにはなるなり。節は形木、かかりは文字移り、曲は心なり。息と機と、節と曲との分目、能能智べし。稽古云、「声を忘れて曲を知れ。曲を忘れて調子を知れ。調子を忘れて拍子を知れ」と云り。

又、音曲を習ふ次第、先文字を覚ゆる事、其後節を極むる事、その後曲を色どる事、其後文字の正を分つ事、其後心根を持つ事。拍子は初・中・後へわたるべし。

声をつかふ事、声の向きたる時を失はじとつかふべし。

　又、音曲に訛る事、節訛は苦しからず。文字訛りは悪かるべし。此分目、又大事也。能能習べし。文字訛りと申は、一切の文字は、正が違へば訛る也。節訛りは、てにはの仮名の字の声なり。てにはの字の正は、云流す言葉の吟のなびきによりて、正が少し違へ共、節よければ苦しからず。「軽重・清濁は上による」と云り。又、便音とも云。能能口伝すべし。てにはの文字の事、は・に・の・を・か・て・も、・し、如此の終り仮名は、正は少し違へども、節のかかりよければ聞きにくからず。節・曲と申は、大略、てにはの文字の響き也。

　惣じて、音曲をば、いろは読みには謡はぬ也。真名の文字の内を拾いて、てにはの字にて詰め開きて謡ふべし。平・上・去・入、四声可合。

漢書云、「十二律、本来、律暦子、■論山行、男鳳声・女鳳声聞而、律呂にうつす」と云云。律は男鳳声、陽。呂は女鳳声、陰。律は上より下る声、入息。呂は下より上る声、出息。律は機より出声、呂は息より出声。律は無、呂は有。然者、律は主、呂は横なるべき歟。

論語云、「熊・虎・豹、弓のまとの皮也。虎天子、豹諸公、熊大夫」。然者、「こ・ほう・ゆふ」とこそ云べけれども、言の吟よく下故に、如此云也、云云。

奥段

　凡、此一巻、条条、已上。この外の習事あるべからず。ただ、能を知るより外の事なし。能を知る理をわきまへずば、此条条もいたづら事なるべし。まことにまことに、能を知らんと思はば、先、諸道・諸事をうち置きて、当芸ばかりに入ふして、連続に習ひ極めて、劫を積む所にて、をのづから心に浮かぶ時、是を知るべし。

先、師の云事を深く信じて、心中に持つべし。師の云と者、此一巻の条条を、能能覚して、定心に覚て、さて能の当座に至る時、其条条をいたし心みて、其徳あらば、げにもと尊みて、いよいよ道を崇めて、年来の劫を積むを、能を智大用とする也。一切芸道に、習習、覚し覚して、さて行道あるべし。申楽も、習覚して、さて其条条をことごとく行うべし。

秘義云、能は、若年より老後迄習徹るべし。老後まで習とは、初心より、盛りに至りて、其比の時分時分を習て、又四十以来よりは、能を少な少なと、次第次第に惜しむ風体をなす。是、四十以来の風体を習なるべし。五十有余よりは、大かた、せぬを以て手立とする也。大事の際なり。此時分の習事と者、まづ、物数を少なくすべし。音曲を本として、風体を浅く、舞などをも手を少なく、古風の名残を見すべし。凡、音曲は、年寄の一手取る曲也。老声は、生声尽きて、あるひは横、あるひは主、又は相音などの残声にて、曲よければ、面白き感聞あり。是、一の便りなり。かやうの色色を心得て、此風体にて一手取らんずる事をたしなむを、老後に習う風体とは申也。

　老芸の物まねの事、老・女二体などの物まね、然るべし。ただし、その身の得手によるべし。静かならん風体を得たらん為手は、是、老風に似合所なるべし。若若、狂ひはたらく態得手ならば、似合まじき也。さりながら、其内に、本十分と思はん舞・はたらきを、六七分に心得て、殊更、身七分動に身をなして、心得てすべし。是を老後に習所と知るべし。

しかれば、当流に、万能一徳の一句あり。

　　　初心不可忘

此句、三ヶ条の口伝在。

是非初心不可忘。時時初心不可忘。老後初心不可忘。

此三、能能口伝可為。

　一、是非初心を忘るべからずとは、若年の初心を不忘して、身に持ちてあれば、老後にさまざまの徳あり。「前前の非を知るを、後後の是とす」と云り。「先車のくつがへす所、後車の戒め」と云云。初心を忘るるは、後心をも忘るるにてあらずや。劫成り、名遂ぐる所は、能の上る果也。上る所を忘るるは、初心へかへる心をも知らず。初心へかへるは、能の下る所なるべし。然者、今の位を忘れじがために、初心を忘れじと工夫する也。返返、初心を忘るれば初心へかへる理を、能能工夫すべし。初心を忘れずば、後心は正しかるべし。後心正しくば、上る所の態は、下る事あるべからず。是すなはち、是非を分かつ道理也。

又、若人は、当時の芸曲の位をよくよく覚えて、「是は初心の分也。なをなを上る重曲を知らんがために、今の初心を忘れじ」と拈弄すべし。今の初心を忘るれば、上る際をも知らぬによて、能は上らぬ也。さるほどに、若人は、今の初心を忘るべからず。

　一、時時の初心を忘るべからずとは、是は、初心より、年盛りの頃、老後に至るまで、其時分時分の芸曲の、似合たる風体をたしなみしは、時時の初心也。されば、その時時の風儀をし捨てし捨て忘るれば、今の当体の風儀をならでは身に不持。過ぎし方の一体一体を、いま当芸にみな一能曲に持てば、十体にわたりて、能数尽きず。其時時にありし風体は、時時の初心なり。それを当芸に一度に持つは、時時の初心を忘れぬにてはなしや。さてこそ、わたりたる為手にてはあるべけれ。然者、時時の初心を忘るべからず。

　一、老後の初心を忘るべからずとは、命には終りあり、能には果てあるべからず。その時分時分の一体一体を習ひわたりて、又老後の風体に似合事を習は、老後の初心也。老後初心なれば、前能を後心とす。五十有余よりは、「せぬならでは手立なし」と云り。せぬならでは手立なきほどの大事を老後にせんこと、初心にてはなしや。

さるほどに、一期初心を忘れずして過ぐれば、上る位を入舞にして、終に能下らず。しかれば、能の奥を見せずして生涯を暮らすを、当流の奥義、子孫庭訓の秘伝とす。此心底を伝ふるを、初心重代相伝の芸安とす。初心を忘るれば、初心子孫に伝はるべからず。初心を忘れずして、初心を重代すべし。

此外、覚者の智によりて、又別見所可有。

風姿花伝、年来稽古より別紙至迄は、此道を顕花智秘伝也。是ハ、亡父芸能色色を、廿余年間悉為書習得条条也。此花鏡一巻、世、私に、四十有余より老後至まで、時時浮所芸得、題目六ヶ条、事書十ニヶ条、連続為書、芸跡残所也。

応永卅一年六月一日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　世阿　判

此一巻、世子、孫之家に伝、雖不可出他、道重心通冥慮、則得此書。然者、当流依為瑞骨、為道為家自写書所也。穴賢賢。不可有他見。

永享九年八月日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　貫氏　判